ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.6 June 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

6

CONTENTS

・巻頭言
「型」について②
／永尾　教昭 1

・文脈で読む「身上さとし」（新連載）
連載の目的
／深谷　耕治 2

・伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（35）
天理教教義翻訳の諸相②
／成田　道広 3

・音のちから―中国古代の人と音楽（8）
動物に音楽がわかるのか？
／中　純子 4

・ヴァチカン便り（56）
ローマ法王、ウクライナ侵攻を非難
／山口　英雄 5

・ニューヨーク通信（13）
文化協会でのたすけ合い
／福井　陽一 6

・思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考（19）
仏教にみる障害者像
／八木　三郎 7

・おやさと研究所ニュース 8

第347回研究報告会／連載執筆のねらいと執筆者紹介／2022年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「型」について②

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

前号で相撲を例に出して、「型」の重要性を述べた。世界の中でも特に日本人は、この型を大事にする民族だろう。茶もただ飲むのではなく、花もただ生けるのではなく型を作る。それはスポーツにも及んでいて、すでに述べた相撲だけではなく弓も剣も空手も、その所作つまり型を守りそして「道（どう）」となっていく。ごく最近知ったが、プロの将棋棋士の対戦では駒の並べ方にも厳格な決まりがある。

宗教の神事も当然型が重要で、それは代々引き継がれ滅多に変更するものではない。天理教の場合、つとめ自体は教祖が教えられた最高の祭儀であり、それを変えることは許されない。ただつとめの前段とも言うべき祭儀式は元々神道から取り入れられたもので、今日までも様々な変化を経て現在の形になっている。加えて日本国外で行う場合、それに使用する道具を調達できないなどの理由で変えざるを得ない場合も少なくない。

例えばかつては榊（さかき）の枝で拵えた玉串を奉奠（ほうてん）していたが、筆者の勤めていたフランスに榊は生えておらず、仕方なく似た樹木の枝を使用していた。また祭文と呼ばれる、神道における祝詞のような神へ奉上する言葉が読まれる。これは折り畳んだ紙を右から左へと開いて読み進むが、これは縦書きだからできるのであって、英語などの横文字ではそのような体裁では不可能だ。第一英語などは左から右へと読む。筆者はヨーロッパ出張所の祭典時、これをフランス語と日本語で読んでいたが、フランス語のほうは致し方なく、文言が書かれてあるA4の紙を折り畳んだ紙の最初の部分に貼り付けていた。

このあたりのことは、国によって変えざるを得ないだろう。しかし、ではどこまで変えて良いのかという議論は常に必要になる。一つの目安は、神事に関することは慎重にすべきで、そうでない部分、具体的に言うと教団の行政的、事務的な事柄、つまり俗事はある程度は変えていっても良いということはある。例えば多くの願書は罫紙に墨書というスタイルだが、これも検討を要する。筆を持ったことすらない外国人（日系人を含む）教会長らには現実にそれは不可能であり、普通紙にパソコンで外国語で書いた願書にペンで署名という一般的な形にしていかざるを得ないと思う。そうでなければ、日本にアイデンティティを持たない教会長が海外で着実に増えていくことは難しいかもしれない。

少し話が脇道に逸れるが、筆者がまだ天理教海外部に所属していた頃、この問題を真剣に検討した。その際、反対意見の一つが「罫紙に墨書は永久保存できる」というものがあった。これについては、筆者は懐疑的だ。まだ検証されていない、と言うか検証しようがないからだ。本当に、何万年か後、米ホワイトハウスのトップシークレットの書類から我々の些末な雑誌、書籍に至るまですべてこの地球上から消えてなくなり、罫紙に墨書で書かれたものだけが残るだろうか。仮りにそうだとしても、願書類を永久に残さねばいけないものだろうか。

こうして教団行政的な事柄は海外ではある程度は変更しても良しとしよう。ただ、これもすでに述べたが、天理教では教会の祭典日の変更、特別な祭典の執行、教会内建物の新、改築といった事柄は、決して事務的にはなされず事情運びという大切な儀式を経て実現される。つまり、行政事務的な事柄も、神事によりなされるケースが多く必ずしも俗事とは言えない。従ってそこで「型」が重要となり、堂々巡りのようだが、それのための願書も罫紙、墨書が守られるべきだという議論になっていってしまう。